

古都イスタンブールと決別して 共和国政府はこの地を首都に定めた

アンカラ – Ankara – アナトリア半島の盆地に広がる美しい街

アナトリア半島中央部にある高低差激しい盆地に、トルコ共和国の首都アンカラはありました。

東ローマ帝国時代の砦を起源とする町は、古代からシルクロードの中継地だったといわれます。首都となった時、この町は人口2万5千人の地方小都市でした。

それからわずか100年間に、人口450万人を擁する大都市に成長したのです。



トルコ建国の父が眠る
壮大なアタチュルク廟には
訪れる人が絶えることがない



アンカラ城跡

5～6階建ての鉄筋コンクリート造、朱色の瓦を載せた寄棟屋根の集合住宅が、高低差の激しい土地に、密集して建て詰まる。

しかし、建物の合間に高木が見え隠れするのは、計画的に建設が進められた証拠でもある。

アンカラ市はアナトリア半島の中心部盆地にあり、人口450万人、イスタンブールに次ぐ第2の都市です。しかし、人口密度は200人/km²ほどで、イスタンブールの1/10以下しかありません。アンカラ市街地の特徴は、「激しい高低差」と「ゆったり整然とした街並み」だと思います。

市街地の高低差は200m以上あります。

日本の代表的な坂道の町、長崎は市街地標高差が約50m(グラバー園辺りが最高高さ)、横浜市(人口370万人)の標高差は約150mで日本の大都市ではもっとも大きいと思います。ちなみに、大阪市は約30m(最高高さは大阪城付近)ほどです。

1923年の共和国成立まで、アンカラは人口2万5000人ほどの地方小都市にすぎませんでした。首都になった後100年間で、人口は約200倍に膨れ上がりましたが、人口急増都市に見ら

そこには広幅員で緑豊かな道路網、そして整然と等間隔で並ぶ住宅が広がっています。

これは、共和国成立直後に策定された都市計画マスタープランのお陰といえます。初代大統領ムスタファ・ケマルは西欧の都市計画家に新首都のプランニングを委ねました。

1924年コンペ当選者のドイツ人Lorcherは、古代ローマ時代からのウルス(Ulus)地区を再開発し、イエニシェヒル(Yenişehir)地区に大きな広場を備えた新たな近代都市を建築しました。1932年コンペ当選者のドイツ人Jansenは、アンカラ城南部の中世都市を残し、その周辺の郊外地域を広大なニュータウンにして、アンカラを秩序ある近代大都市に変貌させました。

このマスタープランが実現するには、ムスタファ・ケマルの主導する共和国政府の強い意志と権限があったことは言うまでもありません。



広い歩道と駐車帯、そして街路樹の並ぶ道路。建物はRC造4~5階建てで臙脂の瓦屋根をもつ。

市域北方に無料のケーブルカーが運行している。3.3kmの区間に4駅、200mの高度差を14分で繋ぐ。高低差の激しいアンカラならではの交通機関だといえます。



アンカラのシンボル アンカラ城 アタチュルク廟

双方のシンボルは、トルコ
高速鉄道 (YHT) の通る谷
筋を挟んだ小高い丘上
にあり、共和国首都アンカラ
の歴史を象徴しています。

トルコ共和国建国時にお
いて、2000年の歴史をも
つイスタンブールではなく、
アンカラに首都がおかれ、
そこに建国の父が眠るの
には、歴史的必然性があ
りました。



アタチュルクの柩



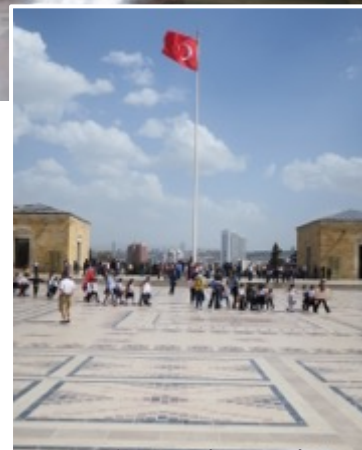
再建された城門



アタチュルク廟

トルコ建国の父、ムスタファ・ケマルの遺体が安
置されていて、その敷地の広さと廟の荘厳さに
圧倒されます。

廟には老若男女問わず多数の方が訪れてい
ました。彼らは、トルコ人なのか外国人なのか、
私には判別できませんでしたが、そこに眠る偉
人には、皆一様に深い敬意を表しているよう
に感じられました。



市街地を見下ろす丘上にある



旧市街から城門への街路

アンカラ城

溶岩が突起したように見える崖上に建つ
アンカラ城は、古代ローマ帝国時代の砦
が起源と言われ、その後数世紀に渡り拡
張増築されてきました。
年々、城壁や城門が復元されて往時の
姿を見せるようになってきたようです。

1918年、オスマン帝国スルタン(君主)メフメト6世は、連合国による帝国領分割を認めたセーブル条約を受け入れ、第一次世界大戦は終結します。

17世紀末、オスマン帝国は、東欧バルカン半島から北アフリカまで版図を広げますが、第二次ウィーン包囲の失敗を境に衰退への道を歩み始めます。

それから第一次世界大戦敗戦に伴う帝国消滅まで、欧州におけるオスマン帝国の位置付けは、日本人には分かり難いところがあります。誤解を恐れず例えれば、この時期のオスマン帝国は、清帝国末期に似ているように思えます。

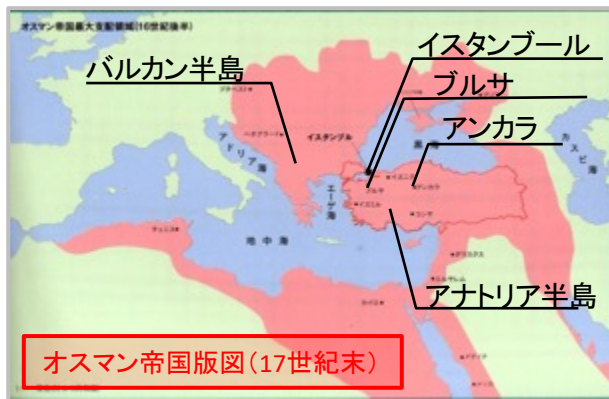
憲政と専政の狭間で揺れ動いた国内権力闘争とエジプトやバルカン半島などの帝国領の半独立化が中央集権体制の無実化を加速し、ロシア、オーストリア、イタリア等との相次ぐ対外戦争が帝国弱体化に追い打ちをかけました。

オスマン帝国の解体過程に伴って生じ、19世紀に顕著となった帝国領内での紛争に関連する欧州諸国間の国際問題を、欧州の政治家は「東方問題」と称しました。第一次世界大戦前の「欧州の火薬庫」と中学校の世界史で習ったバルカン半島の政治不安定状況は帝国の弱体化がもたらしたものでした。

オスマン帝国が機能不全に陥り、混乱の続く国内情勢の中、ムスタファ・ケマルはアンカラにて新政権樹立を宣言してセーブル条約受諾を拒否。進駐軍と対峙して、ギリシャ軍侵攻を撃退し、連合国との新たな講和条約締結に成功します。

彼は、トルコ民族の自決を守り抜き共和国建国に導いた英雄でした。また、大胆な欧化政策と脱イスラム国家化を強権をもって推し進めたことでも知られています。西欧諸国にならって国民全員が姓を持つよう義務付けたのもその一つで、「父なるトルコ人」を意味する「アタテュルク」は、彼が国民議会から贈られた姓でした。

共和国首都にアンカラが選ばれたのは、アナトリア半島の中央部に位置して交通の要所にあること、広大な盆地に将来的な首都としての発展余地があったこと、オスマン帝国の首都イスタンブールと古都ブルサから離れていたこと、当時の紛争中心地のバルカン半島からも距離があること等が理由ではないかと思えます。



以下、旅行で感じたトルコ人に対する印象です。

トルコ人はよく「親日的」と言われますが、町を歩くと確かにそうだと感じました。道端でバスを待っていると、横に座った老人から「日本人か(japon?)」とよく聞かれました。欧州では、まず「中国人か?」と聞かれ、次に「日本人か?」または「韓国人か?」と聞かれたのは対照的です。「はい」と答えると、例外なく、こちらの困惑顔も意に介さず、満面の笑顔とトルコ語で話しかけてきます。自分の知りうる日本との関わりを話しているのかも知れませんが、親日的な国民性が感じられた一幕でした。そして親切でした。日本人と同じく表情が豊かではないため、初めはぶっきら棒に感じますが、一人旅のトラブルで困っている私に彼らはとても親切にしてくれました。

トルコ人とは、狭義にはアナトリア半島に住みトルコ語を話すムスリム(イスラム教徒)を指します。民族的にはテュルク語系民族(英語:Turks)の一つとされ、ターキーはテュルクの英語読みです。

世界史で有名なテュルク語系民族国家としては「突厥(とっけつ)」が挙げられます。6世紀頃に中央ユーラシア地方に覇を唱えた国で、漢民族にとっての夷狄として記録されています。東ローマ帝国の史料にも「テュルク」として記され、その存在が東西の大帝国の歴史書に記録されています。

テュルク語系民族では、その後に回紇(ウイグル)が台頭し、1000年頃からイスラム化が始まります。

13世紀にモンゴル帝国の支配下におかれても、テュルク語系文化はモンゴル化することなく続き、モンゴル諸王朝の消滅後は、いくつかのテュルク語系国家が再建されながら、西方(アナトリア半島)に勢力を伸ばしていきます。

トルコ共和国は、テュルクの名前を継いだ唯一の国家で、トルコ国民7000万人の約8割がトルコ人と言われていますが、テュルク語系民族の分布上は最も西にあります。東西文明の結節点にあり、キリスト教国東ローマ帝国とイスラム教国オスマン帝国、世界史上稀に見る大帝国のあった国への旅は、とても楽しいものでした。

